



発行所 島根日日新聞社 〒693-0001 出雲市今市町743-22

山陰あれこれ

158

番外編

令和3年8月30日(掲載予定なし)

公益財団法人・大隅基礎科学創成財団のこと

酒井 董美ただよし

埼玉県鴻巣市こうのすの熊谷康夫氏(元・内藤記念科学振興財団事務長)は、民話語りのお会「どんとはれ」の重要メンバーの一人であり、以前から親しくしている。筆者が毎週二つの新聞に執筆連載している「島根の民話」と「鳥取の民話」を、親しい知人にメール配信している約八十名の中の一人である。親しくなってきたきっかけは、平成二十六年(二〇一四)九月二十七日から二十九日にわたり、宮城県南三陸町で開かれた第十二回全日本語りの祭りだった。以来、いろいろ情報交換を行っている。最近では二十八日に氏の紹介で、横浜市にある大隅基礎科学創成財団の市民講座をオンラインで受講したばかりである。テーマは「地球上の生命の多様性を支える仕組み」として二人の講座があった。①クマムシはどうやって極限環境に耐えるものか(東京大学理学系研究科・国枝武和准教授)、②シロアリはなぜ木材だけ食べて生きていけるのか(東京工業大学生命理工学院・本郷裕一教授)。文系の筆者にとっては理系の二つの話は新鮮で面白かった。

最初の講義では一ミリにも満たないクマムシ(緩歩動物)が、乾燥すると生命が止まり(乾眠状態)、基本的に水の中で四肢で歩くが、肺や心臓はなく、一〇〇℃からマイナス二七、三℃の間や水深七五〇kmの水圧、秒速七二八メートルの衝突にも耐えるとか、月に運んだままだが乾燥しているから生きていると思う、などが話の一部である。二つ目の講座の主人公・シロアリは、木材の大害虫だが、これがないと地球再生はあり得ない、とシロアリの腸内原生成物や腸内細菌(バクテリア)の話に目を見張った。

それはともかく。注目したいのはこの講座を主催している公益財団のことである。理事長の大隅良典(昭和二十年生)東京工業大学名誉教授は、平成二十八年のノーベル生理学・医学賞受賞者で、本財団を作るのにあたり、「日本の基礎科学並びに大学に対する支援が必要であることを訴えて参りました。このたびの受賞を機に、基礎科学振興への期待を単なる一過性のものに終わらせず、継続性のあるシステムの構築を目指すことを願い、多くの方々のご協力をお願いする決意を致しました。」と述べ、設立目的には「現在日本では、性急な成果を求める風潮の中で、健全な基礎研究がおろそかにされ、研究者マインドが低下し、次世代の基礎科学研究者が育たなくなりつつある。世界に先駆けて生物学及びその周辺の新分野を拓き得る先見性・獨創性に優れた研究を助成するとともに、先端的研究者、市民、企業人の有機的つながりを構築し、日本社会の科学基盤の発展に寄与することを目的とする。」と明記されている。

財団のホームページで知ったが、これまでに趣旨に賛同する一〇〇〇名以上の寄付が寄せられており、一口千円となっている。これなら年金生活者である筆者であっても、ささやかながら貢献できそうだと、早速、財団の銀行口座へ送金しておいたが、これに機会に毎年わずかではあっても支援を続けていこうと決意しているところである。

民話仲間の熊谷康夫氏との交流から、こうした発展につながることは、当初は考えもしなかったが、人との交流によつて、思いもかけないことが起きるものである。読者も支援の仲間になられてはいかがだろうか。(元島根大学法文学部教授)